０７・耳元で密着吐息喘ぎされながら、はじめての『攻めセックス』する

『０６・次の日も昼間から民宿の部屋で、ねちねち気持ちいいことを教え込まれて乳首イキさせられる』からそのまま続き。

とある年の夏。七月二十八日（火）十四時半ごろ。
日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。
天気は雨。かなり激しく降っている。気温は二十五度程度。
少し湿度は高いが、心地よい夏の昼間。

場所は、民宿内、弥映の部屋。
主人公、弥映に気持ちよくされたばかり。

ＳＥ１　雨の環境音
【トラック０６のＳＥ１と同じ音】
【途中から最後まで流す】
【その後、繰り返して流す】

【小さめの音量で流す】
【10―18秒ほどまで流してセリフ】
【その後、トラック終了まで、もう一段階小さめの音にして流し続ける】

※同じ音をループさせつつ、『トラック06と07が完全に同じ始まり方である』というのを避けるために、別の位置から流す形で始めていただきたいです※

主人公、とにかく身体が熱くて、心臓がばくばくと跳ね続けて、うっとりして。
甘くとろけそうで、重い。
だから本当は、弥映に抱きついて、今すぐにでも眠ってしまいたい。
……でも、そうするつもりはない。
もっと弥映と一緒に過ごしたいのだ。

だが、弥映は、主人公はもう眠ってしまうものだと思っているらしい。
こちらを嬉しそうに見つめ、『ふふ』と笑いながら、いつ主人公が寝だすのか、それを待っているようにすら見える。
そんな風に見つめられている事すら嬉しいが……とにかく、眠るのはダメだ。

主人公は先ほど同様仰向けになって寝ており、その左隣に弥映が寝ている状態。

●中央　至近距離
「【すごく優しく。主人公の顔を覗き込んで】
んー？
【唇に軽く一回だけキスする】
ちゅ」

弥映、主人公の右耳側にささやきかける。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【甘い声で優しくからかう。またすぐ主人公が寝てしまうと思っている】
イッたんだから寝ていいよ？」

〈主人公〉
「……寝ないよ？　起きてる。絶対起きてるよ」

すると、弥映がきょとんとした表情を浮かべた。

主人公の言葉が意外だったらしい。
やっぱり弥映の認識は歪んでいる。
少なくとも、主人公とは違う認識を持っている。

口ではこちらを『恋人』と呼んでおきながら、それを……主人公が考えるような『対等な関係』だとは思っていないように感じられる。
まるで、何かを与えていないといけないような。
自分の方がより多く負担していないと、関係は維持できないとでも思っているような……。
そんな風に感じられるのである。

そうだとしたら、すごく嫌だ、と思う。

だが、これまで恋人ができた事のない主人公が『自分は恋人とはこういうものだと思っているので、自分はこうする』と行動するならまだしも。
弥映に『自分は恋人とはこういうものだと思っているので、弥映にはこういう事をしてほしい』と説教するのは、あまりにも説得力がないし、効力も薄いように思える。
第一、そんな上から『教えてあげる』といった態度はとりたくない。

だから主人公はもう一度、前者を選択する。
自分が考える、恋人らしい事をする。

弥映、自分も顔と身体を横にして話す。
中央の位置から声が聞こえるようになる。

ＳＥ２　弥映が身体を動かす音
【最初から最後まで流す】

●中央　至近距離
「【すごく嬉しい。寝まいと頑張っている主人公が可愛い】
寝ないの？　ふふふふ。起きたらまたしてあげるよ？
【主人公が腕を伸ばして抱きついてきたので驚く】
ん？」

ＳＥ３　主人公が身体を動かす音
【最初から最後まで流す】

主人公、腕を横に向かって伸ばして、弥映の首に腕を絡めるようにして弥映を抱き寄せる。
弥映はとてもいい匂いがする。
唇は温かく柔らかくて、髪は黒くつやつやで。
肌はすべすべで真っ白で、触れるだけでじんわりとこちらの手になじむ。
まるで、童話のお姫様のような容姿だと思う。

だから昨日は勘違いしていた。
弥映の事を、自分の容姿を武器にしている人だと思っていた。
己の美貌を用いて、他人に言う事を聞かせるのが得意な人だとばかり思いこんでいた。

でもきっと、それは違う。
仮にそうだとしたら、弥映はもっとふんぞり返って、主人公に奉仕されるのを待っているはずだ。
そもそも、主人公は、取り立てて優れた所もなければ、お金も持ってない。
おまけに、かなり年下だ。
そんな、一緒にいて利益があるどころか、話が合うかすらも怪しい人間など、わざわざ

狙いに来ないだろう。
いくら田舎と言えど、もっと都合のいい存在は、いくらでもいるからだ。
だから主人公は、それでも弥映が主人公といてくれる事が、何を意味するかを、ちゃんと理解して信じたい。
弥映が、ちゃんと自分を想ってくれていると、もっと信じたい。

●中央　至近距離
「【すごく嬉しい。主人公がキスしてくれるらしい事を理解する】
んふふ……。
【たどたどしい、唇をくっつけられるだけのキスを三回される】
ん。ん……っ♥　ん」

主人公、そのまま転がって、弥映を押し倒す。
弥映の真上に主人公がいる形になる。

SE4　主人公と弥映が布団の上で転がる音
【最初から最後まで流す】
【右から左に向かって身体を動かすイメージで流す】

●中央　下

「【甘い声で。押し倒された事と、キスされた事が嬉しい】
ふふ……♥　押し倒されちゃった。
【今度は、自分からちゅぽちゅぽした水気の多いキスをする】
ちゅ。
【少し間をあけてから。
一回顔を見つめてからまたキスするイメージ。
自分からちゅぽちゅぽした水気の多いキスをする】
ちゅぽ。
【少し間をあけてから。
一回顔を見つめてからまたキスするイメージ。
自分からちゅぽちゅぽした水気の多いキスをする】
ちゅ♥
【嬉しくて笑う。弥映としてはもう事後のつもり。
『事後もいちゃいちゃできるのって嬉しいな……』と思っている】
ふふふふふふふ。
【少し間をあけてから。うっとりと。すごく幸せ】

キスって気持ちいいよね。あんたも好きだよね？」

〈主人公〉
「うん。好き。大好き。弥映ちゃんが大好き」

主人公、自分の気持ちを伝えながら、思う。

今私がこれを言っても、その意図の半分も伝わらないような気がする。
弥映ちゃんの心は大きな膜のようなもので覆われていて、それは厚く、私の声はなかなか届かないのだ。
それはすごく悲しいし、残念な事だ。
だけどそうだとして、私のする事は同じだ。
弥映ちゃんを好きになってしまった。
それを弥映ちゃんが受け入れてくれる限り、私はこの気持ちを伝えたい。
と。

●中央　至近距離

「【自分からちゅぽちゅぽした水気の多いキスをする】
ちゅ。
【すごく嬉しい】
へへ……そっか。
【すごく甘い声でうっとりと。内心、ドキドキしながら言う】
あたしも。あんたの事も、あんたとキスする事も、大好きだよ。
【すごく甘い声で。『もっとキスしようか』という意味で言っている。すごく嬉しくて、とろけそう】
もっとしよっか……。
【ゆっくりと唇を重ねる】
ん。
☆【※30秒※　キスする。舌を入れる丁寧な甘いキス。軽いのから、だんだん深く、濃いキスになっていく】☆☆☆☆☆
★　ん……♥　ちゅ♥　ちゅ……ちゅっ。ちゅちゅ……ちゅ♥　ちゅ♥　ちゅ♥　れろっ……ちゅ♥　れろ……ちゅ♥　ちゅぽぱっ……ちゅ♥　ちゅ♥　ちゅるっ♥　ちゅぽっ♥
【少し間をあけてから。照れる。すごく嬉しい】
ふふふ。なんかすごい、ラブラブキスって感じ。

【うっとりと。内心、ドキドキしながら言う】
嬉しいな。
【主人公からまたキスされる】
ん。
☆【※30秒※　キスする。舌を入れる丁寧な甘いキス。
途中から、舌同士をねちねち絡めて、遊んでいるようなキスをする】☆☆☆☆☆
★　んんぅ……ん♥　ん、ん♥　ちゅぱっ……ちゅ♥　ちゅ……ちゅ♥　ちゅぱちゅぱ……ちゅ♥　れろ……れろれろれろ♥　ちゅ♥　れろれろれろ♥　れろろ♥」

SE5　主人公が身体を動かす音2
【最初から最後まで流す】

●中央　至近距離
「【少し驚くが、すごく嬉しい】
あ……」

主人公がキスをやめて弥映の身体に触れようとすると、弥映が驚いたように目を見開いた。

それを見て、主人公はためらう。
弥映は驚いているようでもあったし、怖がっているようにも見えたからだ。

同時に、怖くなった。
『自分は、好きな人が嫌がる事をしようとしているのではないか？』という恐怖に、身がすくんだのだ。
そしてようやく、昨日の弥映の気持ちがわかる気がした。
弥映もまた、昨日、ずっとこんな気分だったのではないか。
こんな不安を感じながら、主人公に触れていたのではないだろうか。そう思ったのだ。

……仮にそうだったら、とても嬉しいと思った。
それだけ弥映が、自分の事を考えてくれたという事だからだ。
だとしたら、もっともっと弥映を好きになると思った。
もし自分の予想が当たっているのなら、弥映と同じ体験をして、同じ気持ちになりたい。
でも……。

●中央　至近距離
「【おずおずと、ものすごく甘えた猫撫で声で。すごく嬉しい】

あんたがしてくれるの？」

〈主人公〉
「弥映ちゃんが、嫌じゃなかったら……」

弥映がそれを望まないのなら、無理強いはできない。
当然の事だ。主人公は、弥映が嫌がる事をする位なら、二度と近寄れもしなくなる方が、ずっとましだからだ。

でも、ややあってから、弥映はおずおずと、申し訳なさそうに、質問に質問で答えてくる。

●中央　至近距離
「【少し間をあけてから。
ものすごく甘えた猫撫で声で。内心すごく嬉しいが、申し訳なくて、不安】
いいの？」

主人公は思う。

……あぁ、私達って、なんて臆病で怖がりなんだろう。
それなのにこんな関係になるなんて、つくづく意味がわからない。
と。

つまりはこうだ。主人公達は『出会ってすぐにセックスする』なんて、臆病や怖がりとは縁遠い事をして結ばれたくせに、今になって、相手に何か求める事を恐れている。
でもそれは、ただの怖がりではなくて、お互いを思いやった結果のものであってほしい。
たとえば失敗したら『それでもいい』『別に、ここで終わってもいい』と思うような関係じゃなくて。
これからも一緒にいられる関係でいたいと思うからこその、恐怖であってほしいと。

●中央　至近距離
【キスで唇をふさがれる】
んぅ……♥
【大きめの音がするキスをされる】
ちゅぱ♥」

〈主人公〉

「いいよ。したい。させて下さい」

意を決してそう言った時、主人公はまるで、生まれて初めて告白したような気分になった。

実際、告白と変わらない。

誰かに『好きだ』という気持ちをこんなにはっきり伝えたのなんて、初めてだからだ。

それから、これが仮に告白と同じ意味を持つのだとして。

もしも弥映と、もっと普通に出会って。もっと時間をかけて仲良くなって。

もっと誰もが納得する形で『好きだ』と言えたのなら、どんなに良かっただろうと思った。

だけど、もう時間は戻せない。

誰が見ても奇妙な関係でも、主人公自身、今の状態に自信が持てなくても。

主人公は弥映の事が好きだし、弥映が喜ぶ事がしたい。

だったら、もうそれをして、自分に、弥映に、そして、今すぐには難しくても、いつか周囲にも、自分の気持ちを認めてもらうしかないのだ。

それももちろん、弥映が望むならという前提だが……。

〈主人公〉
「弥映ちゃん。好き。大好きです。嫌じゃなかったら、させてほしい……」

●中央　至近距離
「【嬉しくて、上手く返事ができない】
あ……。
【しばらく間をあけてから。照れていて、少し不安でもある】
なんか、恥ずかしいな。へへ……。
【少し間をあけてから。
ものすごく甘えた猫撫で声で。内心、すごくドキドキしながら言っている】
いいよ。
【少し間をあけてから。
ものすごく甘えた猫撫で声で。内心、すごくドキドキしながら言っている】
あたしが。どうしたら気持ちいいか、知ってほしい」

ＳＥ６　弥映が身体を動かす音２
【最初から最後まで流す】

そう言うと、弥映は主人公の手を取り、自分の左胸に触らせてくる。
それはあまりにも柔らかくて、今度は主人公が驚く。
確かにこの半日ほどのあいだ、何度も弥映の胸が主人公の身体に当たったり、軽く触れたりする機会はあった。
でも、こんな風に、手のひら全体で胸の感触を感じ取ったのは初めてだ。

思わず、ごくっとつばを飲み込む。
……あまりにも、すごい。
信じられない位、触っていて気持ちがいい。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく
【甘く誘うようにささやく。内心とても緊張している】
「おっぱい。触って？」

その時弥映が、とろけるような声で言った。
主人公はもう、頭が爆発しそうだ。
触れているだけでおかしくなりそうなのに、こういうのは困る。

もう『弥映の喜ぶ事を』なんて発想は捨てて、思うままに行動したいとすら思う。

……でも、昨日の弥映は、主人公にそんな事はしなかった。
主人公は、そんな弥映の優しさが嬉しかった。
だったら……。

●中央　至近距離
「【息遣いだけで表現する。胸を触れられて、恥ずかしい】
……っ♥
【息遣いだけで表現する。
かなりゆっくり、大きく呼吸して、緊張と快感に耐えている。
だが、主人公の触り方が、思った以上に丁寧なので少しホッとする】
すうっ……。はぁ。すーっ……。
【息遣いだけで表現する。次から話し始める】
……ふう。
【恥ずかしそうに笑って】
ふふふふ。手、優しー。
【息遣いだけで表現する。安心して、少し慣れてくる】

すー……はぁ……。すー……♥　はぁ……」

弥映、中央の位置のままでささやく。

●●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【すごく優しく】

いいよ？　揉んで？」※

主人公、そのまま弥映の胸を触り続ける。

それはふわふわと気持ちよくて、触ったところから溶けてしまいそうで。

いくらでも、ずっとでも、触り続けていられそうだと思った。

弥映の胸は、薄暗い部屋でもわかるほど白く、こまやかだ。

とてもきれいだと思った。そんなすごいものを触らせてもらっている事が、とても嬉しかった。

〈主人公〉

「すごい……ね……」

だから主人公が素直な感想を述べると、弥映が少し笑った。
どうやら、少しだけ気がほぐれたようにも見える。
つまり態度には出さないが、弥映もきっと、不安なのだろう。

●中央　至近距離
「【余裕ありそうにしているが、かなり気持ちいい】
はは……♥　柔らかくてびっくりした？」

〈主人公〉
「うん……♥」

主人公、うなずく。
もう、どこまでも正直になってしまう。
だって少なくとも、自分のはこんなに柔らかくない。そもそも、こんなに大きくもない。

これまで主人公は、女性の胸に関心がないと言えば嘘になるが、特別執着を持っているわけでもなかった。
男であろうと女であろうと、人の身体の一部分に注目するのはセクハラだ。

だから女性の胸の事も、相手に嫌な思いをさせてまで見たり、触ったりしたいものではないと思っていた。
もちろん、そのスタンスは今も変わらない。
でも、今見方が一つ変わった。弥映の胸を素敵だと思ったし、特別だと思った。
もっとたくさんこの胸に触りたいと思ったのだ。

●中央　至近距離
「【※マークまで、気持ちよくて、呼吸が少し苦しいまま話す。時折呼吸が混じる。少し間をあけてから。同意する。自分で自分の胸を触った時もそう思ったので】
……っ、わかんなくも、ないかも。
【ゆっくり、大きく呼吸する】
すううっ……。はぁ。すー。
おっ、ぱいは。
【少し間をあけてから】
二の腕の柔らかさとか。
【少し間をあけてから】
言う人、いる、けど。
【ゆっくり、大きく呼吸する】

はー……。
おっ、ぱいのが。
断然。ぁ。柔らかいよね。
【少し間をあけてから】
だって……そしたら。腕鍛えてる人は。すごい硬いおっぱいになるじゃんね……」※

それから弥映は、主人公をリラックスさせたいようだ。
小さく笑って、この行為を、何でもない事のような雰囲気にしてくれる。
それはまるで、二人で同じ事を考えているように感じられて、主人公は嬉しくなる。
やっと二人で、嬉しい時間を作るために、協力し合っているように思える。

●中央　至近距離
「【ものすごくゆっくり、三回呼吸する。
少しずつ息が上がってくる。胸を触られて、思った以上に気持ちがいい】
ん。すぅ……はぁ。はぁ。
【少し間をあけてから。高く甘い声ですごく優しく。
『全然包めてない』は『主人公の手では、弥映の胸を包み切れないくらいサイズが合わない』という意味】

ふふ。手ぇちっちゃいね。全然包めてない。
【本格的に感じてくる】
でも……。う。
【すごく嬉しい。とても勇気を出して言っている】
気持ちいい……♥
【ものすごくゆっくり、六回呼吸する。
だいぶ息が上がってくる。胸を触られて、思った以上に気持ちがいい】
はー……ふー……はぁ。はー……すぅう……はぁ……♥
【すごく感じる。乳首に触られたので】
う。んっ……♥　うっ。う♥
【少し間をあけてから。すごく甘えた猫撫で声で。
『主人公の愛撫は上手すぎませんか？』という意味で言っている】
ねぇ……上手くない……？」

〈主人公〉
「上手くないよ。弥映ちゃんが教えてくれたみたいにしてるだけ……♥」

●中央　至近距離

「【主人公の言葉を復唱する】
あたしがしたみたいにしてるだけ……？
【ものすごくゆっくり、六回呼吸する。かなり感じている】
はー……すー……ふー……。はー……ふー……ふー……。
【すごく嬉しい】
そっ、か。
【小さく喘ぐ。本格的に気持ちよくなってくる】
うっ。あ……♥
【低音喘ぎになる。特に『あ』を抑える。大きな声を出したくない】
ぁ。ぅ。ぁぁ……♥
☆「【※15秒※　喘ぐ。吐息喘ぎと、こらえるような低音喘ぎのみ。
声を出すのは恥ずかしいし、大きな声を出したら『うるさい』と思われるかもしれないと思い、こらえているイメージ】☆☆
★　……ぁ。ぁ。う。うっ……♥　ん……♥　はー、すー。ふう……。ぅ。ぁ♥　んっ……♥　ぁ♥
【高く小さく喘ぐ。ものすごく気持ちいい所に触れたので】
うぅっ……♥
【ものすごくゆっくり、耐えるように六回呼吸する。かなり感じている】

はっ……はー……。は……。ふー……ふー……ふー……。
【ゆっくり、低音喘ぎになる。大きな声を出したくない】
あ。ぁ。うっ。
【※マークまで、ゆっくり、低く、耐えるような声で感想を伝える。
声をこらえすぎていては、
主人公が『気持ちよくないのではないか』ち不安になるかも知れないと気づく】
すっごい。いいよ♥
乳首これ。好き……。
ずっとされたい位、好き……♥」

〈主人公〉
「わかった。ずっとしてあげるね……♥」

●中央　至近距離
「【高く甘えた声で。主人公が優しいのでほっとする】
うん♥　ずっとして……？
【※マークまで、甘えた声で。一つずつゆっくりと。
主人公に、触り方の希望を伝えられるようになってくる】

摘（つま）んで。
弱く。くにくにって。
ころころって、して？
【ものすごくゆっくり、耐えるように六回呼吸する。かなり感じている】
はっ♥　すうー……。はー……♥　すー……はー……すー……♥
【キスされる】
んっ……♥
【唇をふさがられるような重ねるだけのキスを四回される】
んっ。んっ♥　んっ♥　んぅ……♥
【ゆっくり荒く六回呼吸する。かなり感じている】
はぁ……すー……はー♥　すーっ……。はぁ♥　はぁ……♥
【うっとりと】
気持ちいい……♥
【何とか余裕ぶろうとする。『えっちにからかってくるお姉さん』のキャラクターに戻れる】
あんた、絶対セックスの才能あるよ。
【小さく喘ぐ。すごく気持ちいい】
ん……♥
【ゆっくり、うっとりと。内心ドキドキしながら本音を伝える】

だって。すっごい気持ちいいもん……♥」

〈主人公〉
「ないよ……♥　そんなの」

●中央　至近距離
「【小さく喘ぐ。すごく気持ちいい】
う♥
【甘ったるい声で。少し余裕が出てくる。
『えっちにからかってくるお姉さん』のキャラクターを維持しようとする】
……あるよ♥
【うっとりと。内心ドキドキしながら本音を伝える】
この手、なんか嬉しい。
【うっとりと。内心ドキドキしながら本音を伝える。
『そうじゃなかったら』は『主人公にセックスの才能がないとしたら』という意味】
そうじゃなかったら……。
【小さく喘ぐ。すごく気持ちいい】
ぁ♥

【少し間をあけてから。
うっとりと。内心ドキドキしながら本音を伝える】
あたしがあんたの事好きだから、気持ちいいのかも」

主人公、だったら、それは逆も成り立つはずだ。と思う。
実際問題、事実として、自分には何のテクニックもない。
本当に弥映の真似をしているだけだ。
だからもし、そんな自分でも弥映を気持ちよくできているのなら……。
それは、自分が弥映の事を好きだから、気持ちよくできている。そんな気がするのだ。

●中央　至近距離
「【照れ笑いして。すごく勇気を出して言う】
へへ。すっごい今……。
【すごく勇気を出して言う】
幸せ。
☆「【※15秒※　喘ぐ。吐息喘ぎと、こらえるような低音喘ぎのみ。
声を出すのは恥ずかしいし、大きな声を出したら『うるさい』と思われるかもしれない
と思い、こらえているイメージ】☆☆

★　はー……すー……う♥　う。ぁ……♥　……ぁ♥　う……♥　う♥　う、う♥　うんっ……ぁ♥

【ゆっくり六回呼吸する。かなり感じている】

はー……すうぅ……はー♥　すーっ……。はー♥　はぁ……♥

【低い声で甘く訴える】

ねぇ。もっと。してくれる？」

ＳＥ７　弥映が主人公の手を布団の中に入れ、股間に導く音

【最初から最後まで流す】

すると弥映が上目遣いで主人公を見つめて、一番弱い場所に、主人公の手を導いた。

主人公は驚く。

今度こそ、心臓が爆発する。そう思うほどドキドキする。

弥映は今、自分にこんな事を許すほど心を開いてくれて、自分を認めてくれている。

そんな風に思った。

それがたまらなく嬉しくて……。

主人公は、なんだかまるで、何でもできるような気持ちになってくる。

弥映、主人公の右耳側に移動する。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【ゆっくり六回呼吸する。かなり感じている】
はー……すうぅ……はー♥　すーっ……。はー♥　はぁ……♥
【甘く誘うようにささやく】
この奥。触って？」※

〈主人公〉
「……！」

主人公、黙ってうなずくと、弥映の白い手に導かれて、その場所へ触れる。

――それにしても弥映ちゃんは、私には徹底して恥ずかしい言葉を言わせるくせに。
自分は『この奥』なんて、ぼかして言うんだな。
なんかずるいけど、追及したいところだけど。
まぁ、許してあげようと思った。

弥映ちゃんは、今すごく恥ずかしそうで、申し訳なさそうで、余裕がなさそうに見える。
それを私はとても可愛いと思ったし、包んであげたい気持ちになったのだ。

SE8　主人公が、弥映の股間に触れる音
【最初から最後まで流す】

SE9　弥映の股間の水音1
【最初から最後まで流す】
【小さめの音量で流す】

〈主人公〉
「ぁ。すごい、濡れてる……」

そして触れた途端、驚くほどテンプレートな感想が出た。
フィクションの中で、飽きるほど聞いたセリフである。
主人公、我ながらもう少し何か言えないものかと思い、恥ずかしくなる。
だが同時に、すごくホッとした。
もし乾いたままだったら、自分はひどくショックを受けて委縮していた。

ともすれば、この先ができなくなっていたかもしれない。
でも今、弥映を気持ちよくできている事がわかって。
『自分の触り方は間違っていなかった』と、少し安心できたのだ。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【恥ずかしいが、すごく嬉しい】
へへ……うん。ぐじゅぐじゅに、なっちゃっ、た。
【少し間をあけてから。恥ずかしいが、すごく嬉しい】
あんたと変わんないね……♥
【ゆっくり三回呼吸する。かなり感じている】
はー……すうぅ……はー♥
【かすれた甘い声で。
内心、とてもドキドキしている。『ここ』は『性器』の事】
ここも。あたしだと思って触ってほしい……♥」

SE10　弥映の股間の水音2
【最初から最後まで流す】

こうして、主人公は『ここ』にたどり着いて、生まれて初めての行為が始まった。

だから、主人公は理解する。

こんなの、触られる時よりもよっぽど緊張するし、怖い。と。

……だって、こんな弱い所を傷つけてしまったら。そのせいで、弥映ちゃんを嫌な気持ちにさせてしまったら。

あるいは、どれだけ頑張っても、ちっとも気持ちよくさせてあげられなかったら……。

そんな悪い想像ばかりが浮かんで、不安になるからだ。

でも弥映は、嬉しそうに主人公を見つめる。

ゆっくりと呼吸しながら、こうしている事自体が稀有な幸せのように、目を細めて、優しい表情を浮かべる。

それを見ていたら、主人公は……。

やっぱり『なんでもしてあげたい』と思ってしまうのだ。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく

【少し驚いて。思ったより刺激が強いので】

※大きな声にはならないようにお願いします※

あっ……♥

【少し間をあけてから。
少し驚いて。他人に触られる事は、思っていたよりも刺激が強いので】
すご……こんな……なるんだ」

ここでSE10が一度止まる。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【不安になる。驚くあまり、誤って主人公を拒絶してしまわないかと心配になる】
ね、ぴったりくっついてして……？
お願い。
ぎゅってして。こっちの手握ってして？」

弥映、余裕がなくなってきて、うまくささやけなくなる。次のセリフは普通に話す。

ここでSE10が再開する。

●右　至近距離

「そう。このまま……して？
【耳元で、はぁはぁ吐息喘ぎする】
※特に聞き手をドキドキさせるイメージでお願いします※
あ♥　うっ……ぁ♥　はーっ。はーっ……はーっ……。ぁ。う。う。う……っ♥　はぁ……
はぁ……はぁ……。
【すごく勇気を出して希望を伝える】
あ、のね。そ、こ。くちゅくちゅってしてほしい……。
【すごく気持ちいい】
ん♥
【※マークまで。ゆっくり、ものすごく感じながら。
どうしたら自分が気持ちいいかを主人公に教える】
そう……そのまま。の、速さで。触ってっ、ほしい……。
【低く、耐えるように喘ぐ。ものすごく気持ちいい】
うううっ……♥　あ。ぁ。
【話すために呼吸を整える】
はぁ、はぁ。はぁ。
そう……上手、だよ。
【低く、耐えるように喘ぐ。ものすごく気持ちいい】

ああっ……。

【話すために呼吸を整える】

はぁ……はぁ……はぁ。

【『ぬるぬる』は愛液の事】

時々っ。奥触って。ぬるぬる。付け直す……みたいにして。

【低く、耐えるように喘ぐ。ものすごく気持ちいい】

う♥

たまに。ぐっ、て、圧迫するみたいに。してっ。みて？

【低く、耐えるように喘ぐ。ものすごく気持ちいい】

あぁぁ……♥　ぁ。ぁ。ぁ」

ここでSE10の速度が一段階早くなる。

●右　至近距離

「あ、のね？　あたしも、腰っ、動かすから。

そのまま。同じ風に。擦（こす）るだけで、いいよ……。

【ひときわ低く、ゆっくり喘ぐ。ものすごく気持ちいい】

あ……♥

これ、好き。そのまま……して……♥　※

☆【※３０秒※　耳元ではぁはぁ吐息喘ぎ】☆☆☆☆☆

※特に聞き手をドキドキさせるイメージでお願いします※

はぁ……ぁ♥　あ。あ♥　あぁ……♥　はぁぁ……はぁ……はぁ……う♥　ううっ……ぁ♥　ぁ、ぁ、あ♥　あーっ……あ♥　はー、すー、はぁぁ……。あ。う。ん♥」

弥映、再び主人公の右耳にささやく。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【少し早口になる。余裕がなく、語彙が乏しくなる。主人公を安心させたくて気持ちを伝えようとするが、上手く話せなくなってくる】

ね。これ。すごいね？　すごい……。すごいぃ……。

ほんとに、上手い。

すごいね。すごい、気持ちいいよ……♥

【抑えるように高く喘ぐ】

う。

【小さく喘ぐ。かわいくうめくような喘ぎになってくる】

うんっ……ぁ♥　あ……♥

【話すために呼吸を整えようとするが、うまくいかない】
はー……。すうぅ……う♥　あ……♥　ふう、ふう、ふう……。
【気持ちよすぎて、独り言っぽくなる】
気持ちいい……。
【高く小さく喘ぐ。イくのをこらえている】
あ♥
【ゆっくり低く喘ぐ。イくのをこらえている】
あ。んっ……。
【ゆっくり吐息喘ぎ。余裕がない。イくのをこらえている】
はーっ。すーっ。はーっ。ふう。はーっ……ふう。
【イきそうになる】
う……！」※

ここでSE10と11が切り替わる。

SE11　弥映の股間の水音3
【最初から最後まで流す】

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【八回、荒い呼吸をする。必死でイくのをこらえている】
はーすぅ。はーすぅ。はーすぅ。はーすぅ……。
【甘えた声で】
ねぇ。気持ちいいよ。
あたし……あんたの手で。
【イきそうになるのをこらえる。『イッちゃうんだね』が途切れる】
イッ……ちゃうんだね。
【高く小さく喘ぐ。イくのをこらえている】
う♥
【少し早口になる。もう余裕がない】
嬉しい……。すごい幸せだよ。
【八回、ゆっくり、荒い呼吸をする。必死でイくのをこらえている】
はーすぅ。はーすぅ。はーすぅ。はーすぅ……。
【甘えた声で】
ね♥　このままイけるっ。から。このままして……？
【濁音っぽい喘ぎになる。気持ちよすぎて】
〝あ♥

【ゆっくり、とぎれとぎれに低音喘ぎする】
あ。う……ぁ♥　ぁぁ……ぁ♥　あぁぁ……ぁ♥　ぁ♥　ぁ♥　ぁ♥
☆【※３０秒※　耳元ではぁはぁ吐息喘ぎ】☆☆☆☆☆
※特に聞き手をドキドキさせるイメージでお願いします※
★　はぁ……ぁ♥　あ。あ♥　あぁ……♥　はぁぁ……はぁ……はぁ……う♥　ううっ……ぁ♥　ぁ、ぁ、ぁ♥　あーっ……あ♥　はー、すー、はぁぁ……。あ。う。ん♥
【八回、早く荒い呼吸をする。必死でイくのをこらえている】
はーすぅはーすぅ。はぁはぁ、はぁはぁ♥
【ゆっくりと耐える。まだイかない。もう少しでイきそう】
ね。イ、きそう」※

ここでＳＥ１１の速度が一段階上がる。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「☆【※１５秒※　耳元ではぁはぁ吐息喘ぎ。
可愛く聞こえる範囲で、こらえるような濁音喘ぎ】☆☆
※特に聞き手をドキドキさせるイメージでお願いします※
★　〝あぁっ……♥　〝う♥　〝うっ……♥　〝あ……！　〝あ♥　〝あ、〝あ、〝あ♥　はーはー

……はーはー……♥

【少し早口になる。もう余裕がない】

ねぇ。好き。好きだよ……♥　好き。好きっ……♥

【再び濁音っぽい喘ぎになる。気持ちよすぎて】

〝あ♥

【ゆっくり低く喘ぐ。イくのをこらえている】

あ。ぁ。ぁ。あ……♥

☆【※15秒※　耳元ではぁはぁ吐息喘ぎ。

可愛く聞こえる範囲で、こらえるような濁音喘ぎ】☆☆

※特に聞き手をドキドキさせるイメージでお願いします※

★〝あぁう……♥　〝あ♥　〝あぁっ……♥　〝あ♥　〝あ♥　〝あ、〝あ、〝あ♥　はーはー

……はーはー……♥

【泣きそうな声で。あと少しでイきそう】

……イぐっ。イく。イく。イっちゃう……♥

【イくのをギリギリ耐える】

くっ」

ここでSE11の速度がさらに一段階上がる。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「☆【※15秒※　耳元ではぁはぁ吐息喘ぎ。余裕がなく、ほとんど呼吸】☆☆
※特に聞き手をドキドキさせるイメージでお願いします※
★　うっ。ふう……ふうふう……はっ、はっ、はっ。……ぁ。う。う♥　あぁっ……ぁ♥
【八回、一回ごとに大きく区切って、早く荒い呼吸をする。必死でイくのをこらえている】
はーすぅ。はーすぅ。はーすぅ。はーすぅ。
【可愛く小さな声で。まだイかない。次でイく】
あ。もう、イく。イっ……ぁ……！
【ここでイく。『イく』と最後まで言えずに『イぁっ』となる】
イぁっ……♥」

ここでSE11が止まる。

●右　至近距離
「☆【※20秒※　耳元ではぁはぁ吐息喘ぎ。
イったあとの余裕のない呼吸も全部、攻める側初体験の主人公に聞かせて、性癖をゆがませるレベルでドキドキさせるイメージ】☆☆☆

★　はぁすぅ。はぁすぅ。はぁふぅ。はぁふぅ。はぁぁふぅ、はぁぁふぅ、はぁぁふぅ……。はぁすぅ、はぁすぅ、はぁ……」※

主人公、イったばかりの弥映の呼吸が収まってきたのを見計らって、キスをする。
とにかくそうしたかった。
弥映がそうしてくれた時、主人公はとても嬉しかったからだ。

SE12　弥映と主人公が布団で転がる音
【最初から最後まで流す】
【小さめの音量で流す】

●中央　至近距離
「【三回、ゆっくり、たっぷりとキスされる】
ん♥　んんぅ……♥　ん♥
【ものすごくゆっくり、六回呼吸する。イった余韻でめちゃくちゃ気持ちいい】
はー……すー……はー。はー……すー……はー……。
【しばらく間をあけてから。
恥ずかしいが嬉しい。正直なところ、人に触ってもらってイけるか不安だった】

へへ。イっちゃった。
【※マークまで、ものすごく甘えた猫撫で声で】
教えちゃったね。
あたしがいつも、どんな風にオナってるか……♥
【『ゆっちゃ』は『言っちゃ』の意味】
誰にもゆっちゃダメだからね？　※
【唇に軽く一回だけキスする】
ちゅ……♥」

弥映、そう言って微笑むと、主人公の手を取る。
主人公としては、すっかり濡れてしまっているから、あまり触らない方が……と思うのだが、何か気になる事があるらしい。

SE13　弥映が主人公の手を取る音
【最初から最後まで流す】

●中央　至近距離
「【主人公の指が愛液でどろどろなのに気づいて】

あぁ……一杯してくれたから、指ふやけちゃったね」

弥映、言うと、主人公の右手指、弥映を愛撫していた指を口にくわえ、それが当然のように舐め始める。

●中央　至近距離

「【主人公の指をくわえる】

はむっ……♥

☆【※３０秒※　主人公の指をゆっくり、ていねいに舐める。

聞き手を『そんなに丁寧に、長く、熱心に舐めるの!?』と驚かせるイメージ】☆☆☆☆☆

★　んっく……ちゅ♥　ちゅぱ……ちゅ。じゅる、じゅる。じゅるっ♥　んっ、ふっ……ちゅ♥　じゅるるっ……ちゅ♥　ちゅぽ、ちゅぽ。ちゅ♥　ちゅぽぽっ……ちゅ♥

【指をくわえたまま話す。

『指紋の部分がぼこぼこにふやける位触ってくれて嬉しい』という意味で言っている】

指紋のとこぼこぼこになってる……♥

【指を口から離してから】

気持ちよくしてくれて、ありがとう。

【舐めてぬるぬるになった指にキスする】

ちゅ♥

【そのまま三回、ゆっくり、たっぷりと指をちゅぱちゅぱする】

ん♥　ん……♥　ちゅ♥」

〈主人公〉

「……！」

主人公、返す言葉も見つけられずにただただ指を舐められ、硬直する。

こんなの、フィクションでもまだ見た事がなかった。

おそらく、する人はする行為なのだろうが、主人公にはまだ、この発想自体がなかった。

主人公の指は今、弥映の愛液から、弥映の唾液でべとべとになった。

洗わなくてはいけない状況は変わらない。

なのに、それを少しも嫌だと思わなくて、むしろ、とても嬉しい事をしてもらった気分だ……。

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「うっとり幸せそうに、でも少しからかうように。

ダメ押し。ここで、主人公と聞き手を完全に落とす】
ほんとに自分でするのと全然違うね」※

そんな中、弥映が嬉しそうに笑った。
そんなものを見せられたら、主人公はもうダメだ。
先ほどまでの主人公は、ただ、一方的に攻められる弱いものとして弥映と接していた。
だが、それが変わった今、今度は弥映の喜ぶ事を何でもしたくて、隙あらば、身も心も手に入れたいと思うようになってしまっている。
欲望のベクトルが反対側に傾き、弥映を征服したいと願いながら、他者から守る側の存在にもなりたいと思う、強い欲が生まれてきたのだ。
それが……主人公を大きく変えていく。

主人公、衝動のままに弥映を抱きしめる。

SE14　主人公が弥映を抱きしめる音
【最初から最後まで流す】

●中央　至近距離

「【※マークまで、すごく上機嫌で。少し驚くが嬉しい】
うん……？　あたしがイッた時もぎゅーしてくれんの？
ふふふふふ。
へへ。あったかぁい……♥」※

〈主人公〉
「弥映ちゃん。好きだよ。大好き」

主人公、弥映を強く抱きしめて、何度も好きだとつぶやく。

そうだ。自分はこの人を守って、喜ばせて、満足させる存在になりたい。
それが私の思う、理想の恋人だ。
私はそれになりたい。そうなって、弥映ちゃんを幸せにしたい。

●中央　至近距離
「【ものすごく甘えた猫撫で声で】
うん……あたしも、しゅき♥
【甘えつつも少し真剣な声で】

離さないでね。このまま。ずっとくっついて寝て……？

【唇に、長く重ねるキスを一回する】

ん……ちゅ♥」

弥映の甘い声を聞きながら、主人公は目を閉じる。

全身は万能感に満たされ、自分は何でもできる、何にでもなれるという思いに包まれていく。

このままフェードアウトして終了。